

## 小野篁の研究

岩 井 美 奈

はじめに

日本の歴史上の人物には、伝説が受け継がれている人物が多く存在する。本稿では、小野篁の生涯や和歌を丁寧に見直し、かつ現代の作品にリメイクされた篁像を明らかにすることで、篁の実像と虚像の両面を象つてみたい。

まず、一では「小野篁」という人物について詳しく述べる。二では篁の生涯の中でも最も大きな転機となったであろう遣唐使船乗船拒否に焦点を当てたい。三では、流罪に処された隠岐での篁の生活や、帰京後の篁の人生について取り上げる。そして、そもそもなぜ二年もしない短い期間で帰京が許されたのかということについても考察したい。また、配流地である隠岐に残されている、篁に関する伝承や篁の遺物などから、隠岐の人々の篁像や、隠岐

の伝説はなぜ生まれたのかについても検証してみたい。四では、篁の和歌作品について読み解く。和歌作品をいくつか挙げ、その和歌が詠まれた背景や出来事について考察したい。五では、小野篁がどのような人物として伝説上で扱われているかを述べていく。六では、現代作品に登場する篁がどのように描かれているのかを述べる。小説や漫画における篁の特徴や性格の描かれ方から、現代の人々に伝わる「小野篁」という人物像を明らかにする。そして全体を通して、篁にはなぜ多くの伝説が存在しているのかということと、篁の持つ特異性について考察していきたい。

### 一 小野篁の生涯

小野篁は延暦二十一年（八〇二）から仁寿二年（八五二）までを生きた、平安時代前期の貴族・歌人・漢学者である。<sup>1</sup>父は小野岑

守で、祖父は小野永見、さらに小野妹子の子孫でもある。篁の孫には小野美材がおり、学芸面、政治面において華やかな経歴を持つ一家である。<sup>(2)</sup>

父の岑守は嵯峨天皇からの信頼が厚く、そのため篁も幼少期から目をかけられていた。しかし子どもころは弓馬に熱中していたため、嵯峨天皇に漢詩に優れている父と比較され嘆かれたことで勉学に励むようになり、弘仁一三年（八二二）、二十一歳の時に官職につく。<sup>(3)</sup>和歌や書、武術、特に漢詩文を得意とし、その詩才は白楽天に匹敵するとまで言われていた。<sup>(4)</sup>書体では、草書・隸書ともに巧みであったとされている。天長七年（八三〇）に父、岑守を亡くし、篁は自身が衰えてしまうほどひどく悲しんだ。<sup>(5)</sup>天長八年（八三一）には『令義解』の選者となり、「序」を撰述する。学問も身に付けた篁は承和元年（八三四）に遣唐副使に命じられる。<sup>(6)</sup>しかし、承和三年（八三二）の渡航失敗後再出発する際に船の欠陥について正使であった藤原常嗣と口論し乗船を拒否する。その後風刺の意を『西道謡』に表すが、その詩がきっかけとなり嵯峨上皇の怒りを受け、承和五年（八三八）に隱岐へ流罪の命が下される。<sup>(8)</sup>しかしその後承和七年（八四〇）には許され都に戻り、のちに従三位、参議の位にのぼることとなる。その自身の意志を曲げずに意見する剛直な姿から、「野狂」と称されていた。<sup>(9)</sup>のちに病のために

参朝が困難になった際には、文徳天皇は金銭や食事などを与え篁の回復を願い、従三位を授けた。<sup>(10)</sup>篁は病に倒れている時、諸子に向けて、自身が死んだら死と同時に葬り人に知らせないようにと遺言し、仁壽二年（八五二）に死去した。<sup>(11)</sup>

篁の父である岑守も参議の位にのぼっている。<sup>(12)</sup>大宰府に大弑として赴任した岑守は、弘仁一四（八二三）年には不作による貧困や飢餓に苦しむ人々のため公営田導入を建議し採用され、四年間実施されている。さらにその翌年の弘仁一五（八二四）年には九州の旅人が飢饉や疾病に苦しんだ挙句亡くなり野晒しになっている人々を見て、療養施設「続命院」を私財をもって造っている。<sup>(14)</sup>以上のことから、岑守は行政的手腕に長けた人物であったことが分かる。このような、岑守の考え方や行動力、また、父との比較の言葉で勉学に励むようになったことなどから、父である岑守の影響を篁は大きく受けているのではないか。

## 二 遣唐使船乗船拒否

前述のように、篁は遣唐使船の乗船を拒否し、隱岐に流罪となってしまう。そもそもこの乗船拒否というのは、どのような原因から、流罪に至るまでになったのだろうか。

日本の最初の遣唐使は舒明二年（六三〇）八月に、犬上御田歟、

薬師恵日らが出発したのから始まった。推古二十二年（六一四）に犬上御田鍬、矢田部造が当時の中国の王朝であった隋に遣隋使として派遣され、翌年推古二十三年（六一五）に帰国してから十五年ぶりの派遣である。<sup>(15)</sup>この最初の遣唐使は二年後の、舒明四年（六三二）八月に帰国した。唐に使者を送り、学問や文化など多くのものを持ち帰ってくることで、日本の文化や学問は大きく発展することが可能になった。

遣唐使というのは日本国の代表である。遣唐使によって国のレベルが判断されるため、選ばれるには多くの条件を満たしている人物でなければならない。具体的な条件には、家柄が良く、気品があり、身のこなしが優雅であること、学問がよくでき教養が深いこと、人格者であり、容姿端麗、高身長であることが挙げられる。<sup>(16)</sup>王勇氏はこの選考について次のように述べている。<sup>(17)</sup>

このような厳しい条件を設けると、遣唐使わけても大使や副使などの引率者に適任する人物がなかなか見つかりにくいのも事実である。たとえば、天平十八年（七四六）の大使選任について、『懐風藻』はつぎのように伝えている。

天平年中に、詔して入唐使と簡ぶ。元来より、此の挙は其の人を得難し。時に朝堂に選び、公の右に出づる無し。遂に大使に拝され、衆僉な悦服す。

「其の人を得難し」とは、おそらく事実だったのであろう。そして、「衆僉な悦服」として選ばれた石上乙麻呂は「地望は清華にして、人才穎秀たり。雍容閑雅にして、甚だ風儀を善くす」と記され、ここから『懐風藻』の著者は学問よりも風貌のほうに注意を向けているという印象を受ける。

乙麻呂の子息の宅嗣も親譲りの美貌の持ち主だったらしく、『続日本紀』は「性は朗悟にして姿儀あり」または「辞容は閑雅にして、時に名あり」と書きとめている。

このように、『懐風藻』では石上乙麻呂の風貌を記しているが、さらに、他の遣唐使の風貌についても他の作品にも記述が見られている。<sup>(18)</sup>

たとえば、藤原常嗣は「立証は明幹にして、威儀は称うべし」<sup>(19)</sup> 『続日本後紀』、菅原善主は「聡恵にして容儀を美しくす」<sup>(20)</sup> 『文徳実録』、藤原松影は「人となりは厳正にして、髭眉は画くが如し」<sup>(21)</sup>（同上）、小野篁は「身長は六尺二寸あり」といった具合である。（略）母親の老衰を理由にして渡航を取りやめた藤原松影は「進止容儀は天骨を得たり」といわれ、のちに式部官吏の手下とされたという。

王氏は『懐風藻』の編者注が学問よりも風貌を重視していたと述べているが、その他の作品にも多くの風貌に関する記述が見ら

れる。これはつまり、多くの人々が遣唐使たちの風貌を認めているということである。つまり、遣唐使の選考基準には想像以上に風貌が他の条件よりも重要視されているのではないか。実際に遣唐使たちをみた唐の人々の反応は、諸国の中でも「倭客最勝」と評価されていたり、阿倍仲麻呂が唐の儲光義の詩の中で、「美無度」と称されている<sup>20</sup>。以上のことから、日本は風貌に最も重きを置き、唐の人々もその風貌を認めていたということができる。

篁の先祖には、遣隋使として活躍した小野妹子がおり、家柄はもちろん、身長も『日本文徳天皇実録』には前述の通り六尺二寸あると書かれている<sup>21</sup>。つまり篁はこれら多くの条件を満たしている、数少ない人物であることが分かる。

篁が遣唐副使として最初に唐に向かったのは承和三年（八三六）のことである。しかし遭難被害に会い、帰国することとなる。その翌年である承和四年（八三七）に再出発を図るが、この時も失敗に終わる。そして承和五年（八三八）に三度目の遣唐使船が向出することとなるが、この時に篁は病氣と偽り遣唐使船への乗船を拒否する<sup>22</sup>。篁が乗船を拒否した理由は、前述のように、正使である藤原常嗣との口論が原因と言われている。口論の理由は、もともと常嗣が乗船予定の第一船が欠陥していて、その船に乗ることを拒否した常嗣は篁の乗船予定であった第二船を自身の船と取り換

えようとした。しかもそれを朝廷に認めさせ、神託によるものという理由までつけていた。それを知った篁は激怒し、乗船を拒否したと言われている。常嗣は遣唐使船の中で最も良い船を選び、自らの第一船としながらも、その第一船が危険と判明すると篁の乗船予定の第二船と交換したのである<sup>23</sup>。さらに、承和三年（八三六）の渡唐の際にも、常嗣はいち早く自身の乗船する船を選び、その船に「大平良」と名付けた。しかしそのような行為は古例にはなく、常嗣のこれらの自分勝手な行動に篁は怒りを覚えていたのであろう<sup>24</sup>。

その後、遣唐使は篁を残し唐に渡ったが、篁は乗船を拒否したことや「西道謡（散逸）」という遣唐使や朝廷を批判する漢詩を作ったことで嵯峨上皇の怒りに触れ隠岐に流罪となった<sup>25</sup>。また、配流される道中にも「謫行吟（散逸）」という詩をつくっており、その詩は「文を知る輩吟誦せざるをなし」といわれるほどの当時評判の素晴らしい詩であったとされていたが、どちらも現在は伝わっていない。しかし、「謫行吟」については『和漢朗詠集』にその一部とされるものが残されている。引用しよう<sup>26</sup>。

渡口郵船風定出 波頭謫処日晴看 野

遣唐使船の遭難は珍しいことではなく、危険を伴うことから、篁も遣唐使制度を批判していた。しかし小名木善行氏はこの時代

の遭難について、

実のところ遣唐使船は難破もありましたが、それ以上に盗賊や海賊に襲われることが多かったのです。襲われれば、舞踊を学ぶため一緒に乗船している若い女性たちや、使節団の優秀な若者たちが犠牲となり、しかも荷物に積んだ数々の財宝も失うことになります。

と述べており、遭難だけでなく、盗賊や海賊による被害が多かったことを指摘している。<sup>(27)</sup>

小野氏には、前述した小野妹子だけではなく外交において活躍した人物が多く存在していた。小野毛野は遣新羅使、小野馬養は遣新羅大使、小野田守は遣渤海大使として活躍していた。<sup>(28)</sup>このことから小野氏は日本の外交において重要な一族であったと考えられる。

第十四次遣唐使には副使に小野石根が選ばれているが、本来は大伴益立が副使であった。この時の遣唐大使であった佐伯今毛人は順風が得られないことを理由に待機の命を無視し帰京してしまふ。そのため、副使であった大伴益立が代わりに責任を取る形で罷免となり、小野石根が副使に任じられた。その後、二回目の出発の際に佐伯今毛人は病気になる乗船をせず、遣唐大使が不在のまま遣唐使船は出発した。この時には無事に渡唐することができ

たが、帰国の際に大使に代わり石根が乗船した第一船が波で破損し、石根は海中に没入してしまい、命を落としてしまった。しかし石根がもともと乗船予定であった第二船は無事に帰着することができた。<sup>(29)</sup>この事件について、佐伯有清氏は、

このような小野一族にとつての忌まわしい過去の出来事を、篁は知らないはずはなかった。いな篁の頭の中に先祖の一人である石根の悲運な出来事がこびりついていたことは確かである。副使の石根は大使佐伯今毛人のためにかけがえのない生命をおとしてしまったようなものである。過去の忌まわしい事件が再現されるかもしれないという恐れをいま石根と同じく遣唐副使の職にある篁が強くいだいたことは十分に考えられるのである。

と述べている。<sup>(30)</sup>つまり、篁にとつて常嗣の行った船の交換という行為は、この事件を思い起こさせるには十分であり、決して許すことができない行為であったと考えられる。まして人一倍正義感の強かったであろう篁には、大使でありながら無責任な行動をとる佐伯今毛人や藤原常嗣のような人々が許せなかったのではないか。

だが、篁は自分が死ぬことを恐れてここまで怒り、乗船を拒否したわけではない。篁ほどの人物であれば、天命に逆らったら死

罪になることは理解していたはずである。どちらにしても命を落とすことになるのならここまで乗船を拒否する理由もないだろう。おそらく、篁は、それ以上にこの遣唐使制度が意味のないものになつてきていることを抗議したかつたのではないか。

篁が遣唐使を任じられていたころの唐は安史の乱や財政の困窮などからくる内部の混乱などにより、徐々に国の力が弱まり始めていた。そもそも遣唐使とは唐の優れた文化や学問などを学ぶために派遣されている使節団であるから、このような衰退が起きている国に行く必要はないと篁は考えたのであろう。

篁が遣唐使の任を拒否した後、常嗣が率いる遣唐使船は無事に渡唐に成功したが、この渡唐が実質的には最後の遣唐使となつた。その後の寛平六年（八九四）に菅原道真によつて遣唐使廃止が決定された。廃止の理由には唐の衰えや唐へ渡る危険性などがあり、<sup>31</sup> 篁はこのような危険で多くの犠牲を出す遣唐使制度に疑問を持っており、だからこそ自らの命を懸けた乗船拒否や「西謡道」を作ること、遣唐使廃止につなげたのではないか。

### 三 隠岐と帰京後の生活

二で述べたような遣唐使船乗船拒否のために篁は配流され、人生が大きく変わる事となつた。天皇に目をかけられ、順調な人

生から一転、天命に逆らつた罪人として流罪にされてしまう。果たして、篁は流刑地である隠岐でどのような生活を送つていたのであろうか。

篁に流罪の命が下されたのは、承和五年（八三八）のことだが、<sup>32</sup> その後の隠岐での記録はほとんど残されていない。篁の作品で一番有名な『百人一首』撰入歌は、隠岐へ向かう最中に詠まれたものである。<sup>33</sup>

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

〔古今和歌集〕巻第九 羈旅・四〇七

また、

思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たきいざりせむとは

〔古今和歌集〕巻第十八 雑下・九六一

という、篁の隠岐での生活を詠んだ和歌も存在している。<sup>34</sup> 篁が隠岐で詠んだとされる歌はこの一首である。以上の二首については四で扱う。

前述したように、篁の隠岐での様子はあまり知られていないが、隠岐には篁に関する伝説が残されている。今回は伝説の中から「呼び水の井戸」と「阿古那伝説」を中心に扱っていききたい。

## (一) 「呼び水の井戸」

まず、伝説の内容から見ていきたい。

この話の篁は、隠岐に流された後、幸福寺という寺に通つていた。<sup>(95)</sup>そこで七重という女と出会い、恋に落ち、子どもを授かる。

また、金光寺の六社権現に、「再び都に帰らせたまえ」と願をかけていた。とある夜、金光寺の山門から光が出ていることに気が付いた。篁は金光寺山に登り、本尊地藏菩薩に和歌を詠みかけた。すると地藏菩薩も和歌を返し、その後「わが姿を刻んで、ここに納めたまえ」と告げられた。篁は告げられた通りに仏像を完成させたが、掘っている時に、削りかすを境内の池に投げ入れたら削りかすが鮎になったり、完成した仏像を「もしこれに性根が入っているならば、この絶壁をよじ登って見せよ」と言つて崖から落としてみると、絶壁をよじ登ってきたりと、不思議な現象が起きた。

さらに、篁が掘つたとされている仏像で、現存している仏像を所有している人の家の裏には、「篁の呼び水」と言われた池や井戸が残されている。篁は隠岐にいた時、池や井戸を掘りあて、人々を助けていた。ある時篁は喉が渴き民家に水を求めた際に、住民から飲み水が不足していることを聞かされ、井戸のある場所に案内を求めた。そして井戸の前で拍手をし、

いつも出て来ぬ瀬戸川水も

今宵世に出て名を流す

と歌つたところ、井戸から水が湧いて出た。

さらにその後、篁は帰京を果たし、七重の子どもを京に迎えた、という話である。

## (二) 「阿古那伝説」

この伝説は、(一)の後の話である。<sup>(96)</sup>

島後都万村那久に転居した篁は、光山寺から五箇村小路の願満寺に通つていた。篁はその途中に宿をとつており、そこには阿古那という里で一番の美女がいた。篁と阿古那は恋に落ちるが、間もなく篁が許され帰京することになってしまふ。篁は阿古那との別れの際に、「顎無地藏」という一對の仏像を阿古那に与えた。この仏像は現在も歯痛が治るご利益のある仏像として伝わっている、という内容である。

この伝説には、内容が少しずつ異なるものがあと二つ伝わっている。

一つ目は、阿古那の母が歯の病に苦しみ、阿古那が看病しているのを見て、阿古那の親孝行ぶりに篁は心を打たれた。そして篁は、仏像を彫り阿古那に与え、阿古那は一心不乱に祈願した。すると母親の病は治つたのであった。のちに母親が死んだ際に母の

霊と篁の仏像を祀り、それが「顎無地藏」とされた、という内容である。

二つ目は、阿古那自身が歯痛の病であった話である。苦しむ阿古那を哀れんだ篁が仏像を彫り、阿古那の歯痛は治る。そのため阿古那は、篁をもてなし、やがて二人は恋に落ちるがその後二人の子どもは死に、さらに篁が帰京することとなり、阿古那は悲しんだ。その別れの際に篁は阿古那に二対の仏像を残していき、それが「顎無地藏」である、という内容である。

隠岐の篁の伝説は他にも存在しているが、今回は特に有名なものを取り上げた。(一)と(二)の伝説で共通しているものは、篁が仏像を彫っていたという点である。田中嗣人氏は、篁と地藏の関連性について、

篁と地藏との結びつきは、冥界（地獄）との関係から伝承の中に取り入れられたことは極めて自然な流れである。我が国の地藏信仰の流れを概観すると、奈良時代には既に流入していたようだが、初期の地藏信仰は極めて現世利益的な信仰であり、ようやく奈良末から平安初期に至って初めて冥界と結びつける信仰が生まれ、さらに来世的地蔵信仰は、撰閑時代を通じて中国南部呉越地方との交流による地藏十王信仰の伝聞で強められ、特に平安中期以降の末法思想と浄土教信仰の勃

興によって、ようやく民衆の間に広く浸透するのである。しかも六道、地獄思想と結んで地藏信仰が展開されるのは、中国でも十世紀の五代・宋初に至ってからである（略）

と述べている。<sup>37</sup> 十世紀になるまでは地獄思想と地藏信仰は結んで展開されていなかったため、篁が隠岐にいた当時の伝説としてはありえない。このことから、田中氏は多くの隠岐の篁伝説で語られている、篁が地藏を彫っていたという描写は、実際には行われていなかったのではないかと結論付けている。<sup>38</sup>

また、呉羽長氏はこのような篁の伝説が多く残され、隠岐の人々が篁に親しみをもつ理由を、篁の悲劇的な「隠岐配流」の物語性が伝説を主張させており、そのような人物に隠岐の人々が、自分たちを関わらせようとすることでこのような伝説が存在するとした上で、以下のように述べている。<sup>39</sup>

ただしこのような親近性は篁が島の人々のレベルに引き据えられたことを示すのではない。彼らはいくまで篁に日常性から離れた貴人像、知恵才能の他に冠絶した超越者を見て自らに関わらせ、いわば篁を隠岐に来るべくしてやって来たカミ（自民族に関わり、幸いを付与する霊）という意識において自らの祖霊的存在に擬そうとしている。

つまり、隠岐の人々にとつて篁という人物は単なる罪を犯して



隠岐に來た人ではなく、隠岐にとって有益な存在としてとらえられていたのだ。

この二つの話には篁の能力が大きく分けて二点描かれている。篁が手を叩き歌ったことで井戸から水が湧き出たということ、篁の彫った仏像が不思議な力を持つていることである。さらに、この話の篁はどちらも隠岐の人々に幸福をもたらしている。隠岐はかつて流刑地であり、そこに來た篁は、立場としては「罪人」である。それにも関わらずこのような良い行いをしているように描かれているのは、田中氏、吳羽氏の論にあることはもちろん、篁の生涯が波乱万丈であり、正義感の強さゆえ隠岐に流されたことを知った後の人々が篁を思い、作り上げたものではないか。

そして、篁自身の官歴や家柄、功績などを知った人々が、伝説にあるような超人的な力を持つ人物として、人間離れた篁像を描いたのではないかと考えられる。

帰京後の篁に関しては、「はじめに」でも触れたように再び官位を得ている。重複する箇所も存在するが、もう一度詳しく見ていく。

まず、承和七年（八四〇）に、罪を許され帰京が叶う。翌年の承和八年（八四一）には官位剥奪前の位である正五位下の位を再び与えられ、刑部少輔に任ぜられた。<sup>(10)</sup>これは異例のことであり、篁が文才に優れた人物であったことが理由であると記されているが、

平林文雄氏はこの異例の措置について、

（略）嵯峨帝が篁の詩才を愛され、さらに「対捍詔旨」とはいつても、もとはといえば大使常嗣の偏頗な処置に憤慨しての、詩人の我儘から発したものであることに對して、同情的な理解を示された結果によるものと考えられる。

と解釈している。<sup>(11)</sup>篁は天命に逆らったため流罪に処されたが、一でも述べたように、幼少期から目をかけられていたことは事実である。死罪から流刑へと罰を軽くし、二年もせず帰京を許し、帰京後は元の位まで与えるなどという行為から、嵯峨上皇が篁をどれほど必要な人物として見ていたかが分かる。

その後、承和九年（八四二）の文徳天皇の東宮時代において学士、式部少輔などに登用された。承和十四年（八四七）に、参議の位に登り議政官として、彈正大弼や左大弁、勘解由使長官など多くの任をこなし、嘉祥二年（八四九）には従四位上に任じられる。<sup>(12)</sup>しかしその後、病にかかり、仁壽二年（八五二）に左大弁として復帰するが間もなく病が再発し、同年に従三位が授けられるが病のため死亡した。<sup>(13)</sup>

帰京後からの篁の生涯をこのように見ていくと、異例続きであることがよく分かる。それほどまでに篁が天皇に重用され、罪の中では死罪の次に重い罪を犯した「罪人」でありながらも、再び

朝廷で活躍しているその姿は、現代でいうヒーロー性のようなものすら感じられる。配流後にも活躍し続け、自分の正義を曲げなかった篁だからこそ、配流地にすら伝説を残せるような人物になったのではないか。

#### 四 篁の和歌

前述のように、篁は和歌や漢詩に優れていた。特に漢詩においては後世の手本ともされた。そのため篁には冥界に関する伝説だけでなく、篁の詩才を評価している伝説も数多く残されている。

また、篁の詩文集である『野相公集』という作品もかつては存在していたが、現在には伝わっていない。『経国集』、『扶桑集』、『本朝文粹』、『和漢朗詠集』に詩文が残されているのみである。

以上のように、篁といえは漢詩が多く取り上げられるが、本論では篁の和歌作品に注目し、篁の人物像を探っていく。

篁の和歌は、『古今和歌六帖』、『新撰和歌』、『秋萩集』、『篁物語』、『万代集』に収録されており、勅撰集には『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『続古今和歌集』、『玉葉和歌集』、『新千載和歌集』にその歌が残されている。篁が主人公で、異母妹や右大臣の娘との恋愛を描いた『篁物語』にも作中の篁が詠んだ和歌が登場するが、この『篁物語』は創作したものであると考えられているため、各

勅撰集に収録されている十四首の和歌のうち十一首と、私撰集である『新撰和歌』と『金玉和歌集』に収録されている六首が篁自身の作であると言われている。今回は『古今和歌集』に収録されている和歌六首の中から三首を読み解き、考察していく。

#### (一) 『古今和歌集』 卷第九 羈旅歌 四〇七

隠岐国に流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟<sup>46</sup>  
この歌は、流罪のために人々と離れることになり、悲しみの中で詠んだ歌である。篁の代表作といわれる作品であり、『古今和歌集』や『新撰和歌』、『和漢朗詠集』、『金玉和歌集』、『深窓秘抄』、『和歌体十種』、『古来風躰抄』などの多くの歌集や歌学書に取り上げられ、『百人一首』にも撰出されている。『古来風躰抄』では、著者である藤原俊成はこの歌について、「人には告げよ」と言へる姿心、たぐひなく侍るなり。」と記している。<sup>48</sup>

では、この歌の詠まれた場所と、「八十島」について考察したい。篁が船出をした場所については、多くの研究者が「難波」だと考えてきた。<sup>49</sup>しかし、川村晃生氏はこの考えを、「難波出船を歴史的事実として証す史的資料、あるいは状況証拠すらも示していな

い」と指摘した上で、「おおよそ契沖説を無批判に繰り返すことにのみ終始してきたと言つてよいであろう」と述べている。そして、島根県史や地理、『延喜式』などの記録から、当時は出雲の千酌駅までは山陰道または山陽道を陸路で辿り、千酌駅からは船で隠岐まで渡つたということを明らかにし、

往時に難波から隠岐に向かう海路など開けてはいなかったのである。従つて篁が瀬戸内海の島々を眺めそれに心を馳せたりすることなどは、あり得なかつた。

と、従来想定されていた海路を否定した。<sup>(50)</sup>そして、二に挙げた、「謫行吟」の一節から「八十島」が隠岐群島そのものであるという結論を出している。川村氏の論を引用する前にもう一度「謫行吟」の一節を引用しておく。

渡口郵船風定出 波頭謫処日晴看 野

この詩から川村氏は、

通説に言う如くこの一句は、篁の隠岐配流時の作と想定してよからう。そして仮にそれが確かに言えるのだとすれば、右の詩句からは次の二点が導き出されてよいはずである。

(1) 篁は郵船（宿駅の間を通う定期船）によつて配流地に赴いたのであり、特別の流人の船などが仕立てられたわけではない。（ちなみに、『色葉字類抄』は、郵船をムマヤノフネと訓

んでいる）

(2) 乗船の折、篁は配所たる隠岐を遙かに、しかしはつきりと遠望していた。

と解説し、そこから、

すなわち篁詠は、右の「謫行吟」なるからうたに対するところのやまとうたとして位置しつつ、難波の浦などにおいてはなく、おそらく千酌駅を出船して隠岐に向かう海路の途次において詠まれたのである。

と結論付けている。川村氏の言う通りに、「謫行吟」に詠まれているように隠岐が遠望できていたなら、難波ではなく出雲で詠まれた歌であると考えの方が自然である。

篁が隠岐に配流になつた時のこの歌を含む二首の詠作事情を記した『小野篁被隠岐国時読和歌語第四十五』という話が、『今昔物語集』に記されている。<sup>(51)</sup>

今昔、小野篁ト云人有ケリ。

事有テ隠岐国ニ被流ケル時、船ニ乗テ出立ツトテ、京ニ知タル人ノ許ニ、此ク読テ遣ケル、

ワタノハラヤソシマカケテコギ出ヌトヒトニハツゲヨアマノツリブネ

ト。明石ト云所ニ行テ、其ノ夜宿テ、九月許リノ事也ケレバ、

明髯二不被覆テ、詠メ居タルニ、船ノ行クガ、島隠レ為ルヲ  
見テ、哀レト思テ、此ナム誦ケル、

ホノくくトアカシノ浦ノアサギリニ島カクレ行舟ヲソ  
オモフ

ト云テゾ泣ケル。

此レハ篁ガ返テ語ルヲ聞テ、語リ伝ヘタルトヤ。

この話には「九月許リノ事」とあるが、篁が流されたのは承和六年（八三九）の春正月であるため、時期が異なっている。よって、この話は作り話であると考えられる。

しかし、二首目の歌は名歌とされており、藤原公任や源俊賴、藤原俊成に高く評価されている。<sup>(54)</sup>この話では二首目の歌も篁の作となっているが、『古今和歌集』にはよみ人知らずで収録されており、さらに左注には、「この歌は、ある人のいはく柿本人麿が歌なり」とも記されている。<sup>(55)</sup>しかし、片桐洋一氏はこの歌が『万葉集』にある人麿の歌と比較し、調べが異なっていることを指摘している。<sup>(56)</sup>さらに、同じく左注により柿本人麿の歌とされている、「風吹けば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」(『古今和歌集』恋三・六七一)という和歌に含まれる「なれや」や「べらなり」という言葉の用例が『古今和歌集』には多くみられ、『万葉集』にはほとんど見られないことについて、

まさしく『古今集』的表現である。したがって左注の「この歌は、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり」は、あくまでも伝承であり、この歌自体は平安時代に入ってから詠まれた、『古今集』的な歌であるということなのである。

と述べている。<sup>(57)</sup>よって、この歌は柿本人麿作ではないと考えられる。また、『今昔物語集』でのみ篁作として扱われていることから、篁の作品でもないと考えるべきであろう。しかし、情景的でありながら寂しさを感じさせる、篁の心情に合致しているであろうこの二首目の歌があるからこそ、「一首目の「わたのはら……」の歌の、孤独の中にも感じられる力強さが際立ち、より魅力的な和歌に感じられる。

この歌は『古今和歌集』の「羈旅」に含まれており、同じく羈旅の一つ前の歌には安倍仲麻呂の歌で、

唐土にて月を見てよみける

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも<sup>(58)</sup>

という歌が選ばれている。この歌も『百人一首』に選ばれ、羈旅の歌として広く知られているが、篁は前述のように二年もせず帰京が叶ったのに対し、安倍仲麻呂は唐でその生涯に幕を下ろすこととなる。この二首の配置によって、遣唐使の任を果たさず流罪になりながらもすぐに帰ることができた篁と、遣唐留学生として

唐に渡り、唐朝で活躍しながらも日本に帰ることができなかった安倍仲麻呂の対照的な人生を強く浮かび上がらせている。

(二) 『古今和歌集』 卷第十六 哀傷歌 八四五

諒闇の年、池のほとりの花を見てよめる

水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな<sup>59)</sup>

この歌は、亡くなった上皇に向けて詠まれた歌である。詞書にある諒闇というのは、『大辞林』によると、

天皇がその父母の死に対し服する喪の期間。期間は一年間で、臣下も服喪した。

と書かれている。<sup>60)</sup>しかし、『日本国語大辞典』にはもっと広い意味でとられており、

天皇の服する喪のうち、最も重いもの。期間一年。本来天皇の父母に対して行われるものであるが、その他に対して行われる例も多い。

と書かれている。この歌に詠まれている天皇は誰を指しているのかは不明であるが、片桐氏は、

作者の小野篁を中心に考えれば仁明天皇が崩じた嘉祥三年（八五〇）の翌年の仁寿元年の春か、嵯峨上皇が崩じた承和九年

（八四二）の翌年の承和十年の春か、淳和天皇が崩じた承和七年（八四〇）の翌年の承和八年の春のいずれかであろう。

と述べている。<sup>61)</sup>嵯峨上皇の崩じた年に天皇であったのは、嵯峨上皇の第二皇子であった仁明天皇であり、諒闇に当てはまる。また、仁明上皇が崩じた年に天皇であったのは仁明天皇の第一皇子であった文徳天皇であり、こちらも諒闇に当てはまる。淳和天皇は崩じた年に天皇だったのは嵯峨上皇の皇子であった仁明天皇であり、広義の「諒闇」に当てはまる。松田氏は「諒闇の年」について、

「諒闇の年」がいつのことかはつきりしない。（略）篁が承和元年（八三四）遣唐副使に任ぜられて後、隱岐配流、召還等をはさんで、後半生をその治世下に生きたことを考えれば、諸注が仁明天皇の崩御をあてるのは、比較的穏やかと思われるが、明証をえないので、断定はできない。

と述べ、<sup>62)</sup>仁明天皇の可能性が高いという考えと受け取ることができる。また、窪田空穂氏も、題意の解説で「諒闇の年」について、天皇が崩御されて、國中、喪に服している期間の称。古制は十三箇月である。古くは「みものおもひ」と呼んだ。諒闇は中国の称で、諒に闇の意。いずれの御代のことともわからない。仁明天皇の際ではないかといわれている。<sup>63)</sup>

と説明している。このように現在最も可能性が高いのは、仁明天

皇の崩じた年の諒闇という説である。篁は嵯峨上皇の怒りに触れ隠岐に流罪になったものの、仁明天皇に帰京を許され、位も与えられている。その理由は天皇が篁の才を惜しんだからとも言われているが、実際は天皇だけでなく、三に述べたように、嵯峨上皇の意向があつたためとも考えられる。しかし、『続日本後紀』には天皇が文才を惜しんだと書かれているため、公には仁明天皇が呼び戻したと考えていいだろう。<sup>64</sup>どちらにせよ帰京を望んでいた篁にとつては、自身を帰京させてくれた仁明天皇は恩人であると考えていたのではないか。そのため、この歌は篁の隠岐への配流や、生きた時代など合わせて考えると、三人の天皇のなかでは仁明天皇が最も納得がいく人物である。

同じく詞書や和歌にも詠まれている「花」についても考えていきたい。「花」とは、『古語大辞典』によると、

①草木の花。②特に、梅の花。③特に、桜の花。

④はなやかなこと。美しいこと。うるわしいこと。

⑤栄えること。名譽。

⑥うわべが美しく真実味のないこと。

⑦露草の花からとつた青い絵の具。

⑧薄いあい色。縹色。花色。

⑨芸人などに当座の賞として与えるもの。祝儀。心づけ。

⑩生け花。

⑪和歌・俳諧で、表現技巧をいう。実(＝真情)に対応し、花と実の相そなわるものがすぐれた作とされた。

⑫《能楽用語》(観客を引きつける)芸の美しさ・魅力。はなやかさ。

と書かれている。<sup>65</sup>小沢氏はこの篁の和歌と詞書を、

帝が喪に服しておられた年に、池のそばの桜を題に詠んだ歌

桜の花が水面に影を落としているのは実に鮮やかであるが、それにつけても花のように美しかった方のお姿を目に見るように私は思い出すのだ。

と訳している。<sup>66</sup>つまり、小沢氏はこの和歌の「花」を「桜」と解釈している。しかし、松田氏や窪田氏、佐伯氏は、『花』は、どんな花か不明。桜ときめることもできないようである<sup>67</sup>や『花』は、何の花ともわからない。花で、桜を意味させたのは、後のことだからである。<sup>68</sup>「花は桜とは限らない」などと述べている。さらに、『古語辞典』には

古典において、「花」という語は、特に「桜の花」の代名詞として使われた。ただ、「花」が「桜の花」の意味だけに使われるのは、中古の「拾遺集」のころであり、それ以前「古今集」

『後撰集』では、「花」は①④のように「桜の花」をさすほか、①⑦のように「梅の花」をさす場合にも用いられた。

とも書かれている。<sup>⑩</sup>この篁の和歌は『古今和歌集』に収録されているものであるから、この和歌の指す「花」は、桜の花ではなく、梅の花の可能性も考えられる。

しかし、『古事談』にはこのような記述がある。

南殿の桜の樹は、本は是れ梅の樹なり。桓武天皇遷都の時、植ゑらるる所なり。而して承和年中に及びて枯れ失せり。仍りて仁明天皇改め植ゑらるるなり。其の後天徳四年（九月三日）、内裡焼亡に焼失し了ぬ。仍りて内裡を造る時、重明親王（式部卿）家の桜の木を移し植うる所なり（件の木は、本は吉野山の桜の木、と云々）。橘の木は本自生へ託く所なり。遷都以前、此の地は橘大夫の家の跡なり。

この記述から、仁明天皇が南殿にあった梅の樹を、樹が枯れたことをきっかけに桜の木に植え替えていることが分かる。梅の木をなぜ桜に変えたのかという正確な理由は知られていないが、佐田公子氏は「桜桃」が唐の朝廷に献上されるような、帝王の権勢の象徴でもあったということや、白居易の詩に「紅桜」という言葉が多く使用されていたことに触れ、

『古事談』（源頭兼 一一一五項）には、仁明天皇の代に、清涼

殿の梅が桜に植え替えられたとあるが、いずれにしても、内裏で桜が持て囃されていたことが分かる。それは、当時渡来して流布し始めた白居易の詩に「紅桜」がかなり詠まれていたこと、また、「桜桃」が帝王と関連が深かったからではないかとも考えられる。桜は、平安時代を賞美するにたる花として、称えられたのである。

と考察している。<sup>⑪</sup>つまり、桜が平安時代の日本で愛されていた理由は、唐の影響であったと佐田氏は考えていると読み取ることができる。一説によると紫宸殿に桜が植えられたのは、平安時代に国風文化が栄えたことが理由のひとつとも言われているが、篁や仁明天皇の生きていた時代は平安初期にあたるため、まだ唐の文化を積極的に受け入れていた時代であることからこの説は少し疑問が残る。しかし、この時代になるとかつては山など遠いところまで見に行くようだった桜が近くで見ることができるようになり、日本の象徴の花は梅から桜に変わり、和歌に詠まれる「花」も梅から桜に変わっていった。以上のことや時代から考察すると、この時代は唐の文化を受け入れながらも国風文化の基礎が作り上げられ始めた時代だったのではないか。そして、前述のようにこの諒闇が仁明天皇の崩じた年のものであったと仮定するならば、仁明天皇の御時に紫宸殿の梅が桜に変わったことから、仁明天皇を

偲んで詠んだ歌として解釈するにはこの和歌に詠まれている「花」は、桜が適している。

(三) 『古今和歌集』 卷第十八 雑歌下 九六一

隠岐国に流されて侍りける時による

思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たきいさりせむとは<sup>(13)</sup>

この和歌は篁が遣唐使批判や朝廷への批判、遣唐使船乗船拒否などを行い、隠岐に流されていたときの作品である。この歌は篁自身の、順調な今までの人生と、官位を奪われ、庶民の身分になつてしまつた現状を比較して、自身を漁師の姿に例え表現して詠んだ歌である。当時の漁は機械もなくすべて人の手によつて行われていたため、今まで都で頭を使うことに慣れていた篁には身体的な疲労と、都とは違い、漁くらいしかすることがない隠岐での暮らしを比較し、落ちぶれた当時の状況を受けての精神的疲労と、二重の疲労がこの歌の「衰へて」に表れているのではないか。また、この歌の表現に関して窪田氏は

「思ひきや」と身世を大観した心をいい、流謫の身の嘆きを一首に縮めて、隠岐の生活を具体的に現わして、太く、強く、重厚の趣をもつていつているところ、これを詩文の余技と見ると、天分の思われるものがある。漢詩に通うものがある。

と述べている<sup>(14)</sup>。また、小沢氏も、

この歌は感情をありのままに述べた線の太い歌で、初句切れの格調に特に力強さが感じられるが、これは漢文訓読語の口調になつたものであろうか。

として<sup>(15)</sup>いる。和歌を詠んでいながらも漢文や漢詩などの特徴を感じさせる点には、漢詩人として活躍していた篁らしさが表れている。

(三)の和歌からも読み取れるように、篁は流罪になり、苦しい暮らしをすることになる。しかし、承和七年(八四〇)には帰京することが叶う。篁が早く帰京できたのは、三で述べたように、嵯峨帝が篁の詩才を愛したことで、遣唐使船の事件について同情的な理解を示したことによるものであるとされるが、以上の和歌からも、篁の詩才・歌才が天皇以外の人々からも評価されていることは明らかである。さらに、嵯峨帝が漢詩を好んでいたこと、当時は詩才・歌才が昇進に関係していたことを踏まえて考えると、帰京後すぐに位を与えられ、再び篁が活躍できたことも、篁の詩才・歌才が大きく影響していたと考えるべきである。



## 五 小野篁伝説

## (一) 広才・詩才

篁の伝説は大きく分けて、異界に関する伝説と、篁の知識や優れた漢詩の才などを伝える伝説の二種類に分類される。本論では伝説を二話挙げ、篁の伝説から読み取れる人物像を考察していく。

## ・『十訓抄』 七ノ六

この話は『江談抄』や『東斎随筆』にもほぼ同趣のものが載っている。

嵯峨帝の御時、「無悪善」と書きける落書ありけり。野相公に見せらるるに、「さがなくてよし」とよめり。「悪」は「さが」といふよみのあるゆゑ、帝の気色悪しくて、「さては臣が所為か」と仰せられければ、「かようの御疑ひ侍るには、智臣、朝にすすみてがたくや」と申しければ、帝、

一伏三仰不来待

書暗降雨恋筒寝

と書かせ給ひて、「これをよめ」とて、たまはせけり。

月夜には来ぬ人待たる

かきくらし雨も降らなむ恋ひつつも寝む

とよめりければ御気色直りにけりとなむ。

「落し文は読むところにとがあり」といふこと、これより始まるとかや。童べのうつむきさいといふものに、「一つ伏して、三つ仰げる」を「月夜」といふなり。(『十訓抄』中 七ノ六) まず、嵯峨天皇が篁に出した問題の文である「一伏三仰不来待書暗降雨慕漏寝」という歌について述べる。この歌の「一伏三仰」という言葉は、万葉集の和歌からとられている。

春霞 田菜引今日之 暮三伏一向夜 不穢照良武 高松之野  
尔(76) (『万葉集』巻第十 詠月 一八七四)

この歌では第三句を「ゆふづくよ」と読んでいる。この言葉は、ここでは「むきさい」と呼ばれている、樗蒲という朝鮮の遊戯に関する言葉で、四つに割られた木片を投げ、その出た目の三つが伏せり、一つが上を向いた状態のことを「月夜」と称している(77)。そのことから「一伏三仰」は「月夜」という意味になっているのである。

また、ここで出てくる歌は『古今和歌集』に「読人しらず」として入っている(78)。『古今和歌集』の成立は延喜十四年(九一四)ころだとされている。嵯峨天皇は延暦五年(七八六)から承和九年(八四二)に生きた人物であり、時代が噛み合っていない。本来なら嵯峨天皇の時代の後に『古今和歌集』が作られているのなら、『古今

和歌集』に嵯峨天皇の名で入集されるはずである。このことから、この話は後世の人が嵯峨天皇が詠んだということにした、作り話であるということが分かる。

(二) 異界の仕事

・『江談抄』 「野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇ふ事」

この話と次に挙げる話はつながっており、どちらも「百鬼夜行」や「地獄」などの言葉が登場している。初めに「野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇ふ事」について述べていく。<sup>80</sup>

また云はく、「野篁ならびに高藤卿、中納言中将の時、朱雀門の前において百鬼夜行に遇へる時、高藤車より下る夜行の鬼神ら高藤を見て、「尊勝陀羅尼」と称へりと云々。高藤知らざるも、その衣の中に、乳母の尊勝陀羅尼を籠めたる故なりと云々。野篁、その時、高藤の奉為に芳意を致し、鬼神に遇はしむ」と云々。

(『江談抄』野篁ならびに高藤卿、百鬼夜行に遇ふ事)

この話では、乳母が高藤の衣の中に尊勝陀羅尼を籠めておいたおかげで高藤は助かっている。実は篁は高藤の衣の中に尊勝陀羅尼が籠められていることを知って高藤が襲われないことを理解した上で、なおかつ篁にとつては「親切心」と称した行動により、

故意に高藤と百鬼夜行を引き合わせた、という内容である。この話では百鬼夜行という鬼の徘徊する集団が登場している。百鬼夜行を怖がることなく百鬼夜行と高藤を引き合わせようとする点や、高藤の衣に籠められている尊勝陀羅尼の存在を高藤が気が付く前に知っている点など、この話の篁も、人間離れた独特な存在に描かれている。

この話に出てくる藤原高藤は承和五年(八三八)から昌泰三年(九〇〇)に生きた人物であり、篁は、延暦二十一年(八〇二)から仁寿二年(八五二)に生きている。二人の生きた時期はわずかに重なってはいるが、二人が同じ時代にこの話のように行動していたというのは考えにくい。この話の冒頭に書かれている「中納言中将の時」というのは篁にはそもそも中納言、中将の経験はなく、高藤さえも中将の経験はない<sup>81</sup>。さらに、高藤が中納言であったのは寛平九年(八九七)から昌泰二年(八九九)のことであり、篁の生きていた時期とは異なっている<sup>82</sup>。つまり、登場人物の二人は実在こそしていたものの、この話は登場人物の設定から作られた話であるということが出来る。

また、この話には「野篁は閻魔庁の第二の冥官為る事」という続きがある<sup>83</sup>。話の内容は、高藤に車を破壊された篁が高藤の父の元を訪ね、その時急死した高藤の手をもって引き起こし、蘇生さ

せた。しかし高藤は急死した時に閻魔王宮に行き、そこで篁の姿を見た、という話である。以上のように、篁に関する伝説は、百鬼夜行に慣れていたたり地獄で働いていた、人を蘇生させたりと、異世界とのつながりを感じさせる内容であり、小野篁という人物の印象を作り上げている。

これらの伝説にはどれも現実味の有無に関わらず、難しい漢字の解説や和歌の知識、百鬼夜行を恐れないこと、地獄で働いていることなど、常人ではできないような内容が書かれている。これは篁が当時の人々にとつても、才能面で一目置かれていた人物であったことが関係していると考えられる。さらに、前述のように篁は遣唐使の任を断り、流罪にされている。天命に背くことは本来なら死罪であることにも関わらず減罪され流罪で済み、しかも多くの人々が流された土地で死んでいく中、篁は短期間での帰京を許されている。このようなことは前例もなく、当時の人々はあまりに早い帰京に驚いたのではないだろうか。このように篁の生涯は波瀾万丈であり、篁の自己を曲げない性格と相まって一種のヒーロー性のようなものを感じさせる。これらのことから、篁の伝説がここまで多くの人々に広まっていった理由の一つには、才能面だけでなく、篁が畏敬の念を持たれるような存在であったこ

とが関係していると考えられる。だからこそ篁は「地獄で働いている」というような非現実的な考えや、「難問をすぐ答えられる」というような人間離れた人という当時の人々の考えにつながっていったのではないか。

## 六 現代作品における扱われ方

「はじめに」でも述べたように、篁は現在でも人気の人物で、多くの作品に登場している。過去の作品における篁の描かれ方は前述の通りだが、現代の作品において、篁像はどのような特徴を持っているのか、史実と異なる点はあるのか、史実や当時の伝説と比較していききたい。そのために、篁の登場する作品の中から、小説『冥官小野篁』と漫画『超訳百人一首 うた恋い。』を選び、一品ずつ見ていく。

### (一) 『冥官小野篁』

この作品は、「浦嶋子伝説」や「真井御前」の謎について、藤原氏の陰謀や、藤原氏によって力が弱まった氏族たちが伝える史実を知ることで真相に迫っていく、歴史ミステリー小説である<sup>64</sup>。この小説では、篁は主人公で、伝説と同じく、昼は朝廷の官吏として働き、夜は閻魔王の補佐として働いている人物として描かれ

ている。本稿で取り上げる箇所には、藤原三守が冥府に送られてくる場面が描かれている。藤原三守は、平安時代初期の公卿であり嵯峨天皇に重用されていた人物で、篁の妻の父にあたる。ここでの三守は、自分がなぜ冥府に連れてこられたのか分からず大声を張り上げ抗議していた。

(略)「まあ、待て」と閻魔王が押しとどめる。

「せつかく小野篁を呼んでおるのだから、まずは、意見を聞いてみようではないか」

ゆつくりと篁の顔を見て、「どうだ？この男は、どうなのだ」と尋ねた。

(略)

「是非とも、本人の申し出通り、現世へ送り返していただきませう」

篁は語気を強めて申し立てた。三守の頬に生気が戻る。胸を反らせて壇上を見上げた。

閻魔王は思案顔になって笏を裁机に置き、眼を閉じた。しばらく黙考した後、「ちょっと待て」と言い残して法廷の奥に姿を消す。篁は怪訝な顔をしたが、耳元で泰山府君が「寿命を占っているんだよ」と囁いた。どうやら、三守の死期を測っているらしい。

(略)

しばらくして閻魔王は戻ってきた。

「分かった。その者は、元の世に戻すことにしよう」<sup>(85)</sup>

この場面では、篁は閻魔王に三守の生死に関する意見を求められ、現世へ送り返すように頼み、閻魔王もそれを聞き入れている。

五では扱わなかったが、この話と似た『今昔物語集』の「小野篁依情助西三条大臣語第四十五」という話が存在している。<sup>(86)</sup>

この話は、若いころに罪科に処された篁を藤原良相が弁護し、その後良相が病によつて急死し閻魔王宮で裁判にかけられる場面で、篁が閻魔王に良相を生き返らせるよう掛け合い、良相を助けた、という内容である。この話は、篁の伝説の中で特に広く知られており、篁のイメージを多くの人々に印象付けている。

篁が閻魔王に良相のお許しを頼み、なおかつ篁の願いを閻魔王が受け入れている。これは人間である篁が閻魔王に気に入られているということ、すなわち篁の人間でありながら人間とは異なっているという異端性のようなものが表現されている。

『冥官小野篁』でも、篁は閻魔王宮で働き、生前助けてもらった藤原三守を生き返らせるよう閻魔王に頼み聞き入れられているため、篁が冥府において重要な人物として扱われている点は伝説と共通している。

伝説上の篁は、前述のように広才であったり、異界と往来している人物として描かれている。しかしこの作品は、藤原氏や淳和天皇をはじめ、実在した登場人物が時代通りに登場し、話の内容も謎解きが中心になっており、篁が主人公でありながらも伝説ほどの印象的な事柄は描かれていない。そのため、現代作品の中でも比較的史実に沿った作品であるといえる。

三の隠岐での伝説も含め、篁が登場する作品の多くは、篁が広才であることや遣唐使船に乗船拒否をしたことなどよりも、冥官として働いていた、不思議な能力を持っていたり、死者と関わりがある人物として描かれているものが多い。おそらく実際には、漢詩や和歌の才の方が、よりよく篁という人物を正確に捉えている。しかしそれでも冥官としての篁が多く描かれているということは、篁の冥府とのつながりという伝説が作者を含む多くの人々に、強い印象を残しているといえるのではないか。

(二) 『超訳百人一首 うた恋い。』四巻

この作品は『百人一首』の歌を題材に、その歌を詠んだ歌人を主人公にし、主に恋歌を描いている漫画<sup>(87)</sup>であり、アニメ化もされ人気を博している。この作品の四巻に、篁と小野比右子の恋を描いた話が収録されている。この、小野比右子という人物は『超訳

百人一首 うた恋い。』の中では篁の異母妹として描かれている。比右子は、篁に漢籍を教えてもらうことになり次第に恋心を抱くが、数年後に篁の遣唐使船乗船拒否によって篁が流罪に処されることになり、比右子も内侍として天皇に仕えることになる。最後は気持ちを通じ合い、篁は船に乗り隠岐へ、比右子は参内するという場面で話は終わる。この作品では、篁が遣唐使船に乗船拒否をして流罪にされる、自分の意見を曲げない人であるという所と、異母妹と恋に落ちるといふ点が特に大きく描かれている。前述した篁と異母妹の恋という設定から、『篁物語』を元にして作られた話であると考えられる。

『超訳百人一首 うた恋い。』のこの話の冒頭は、篁と比右子が漢籍を教える先生と生徒として出会う場面で始まる。そして篁の言葉に、「宮仕えに先立ち君に漢籍を指南するよう、君の実兄、良実殿に頼まれた」とあることから、篁は人に頼まれて漢籍を教える比右子の元へやってきたことが分かる。一方、『篁物語』の冒頭も、篁と異母妹の出会いから始まる。<sup>(88)</sup>

親の、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。女  
 のする才のかぎり、しつくして、「今は書読ませむ」とて、「博  
 士にはむつまじからむ人をせむ」とて、異腹の兄、大学の衆  
 にてありけり、異腹なれば、うとくて、

「あひ見す」

などありけれど、

「知らぬ人よりは」

とて、簾ごしに、几帳たててぞ、読ませける。

『篁物語』では、良実という人物は登場しない。勉強を教えるように篁に頼んだ人は異なっているが、冒頭で、勉強のため、二人が初めて顔を合わせる場面から始まることと、人に頼まれて妹の元へ来たのは『超訳百人一首 うた恋い。』と一致している。

しかし、前述したように、『超訳百人一首 うた恋い。』には、篁が遣唐副使であったことや、隠岐に流されたことも描かれているが、『篁物語』にはそのどちらも一切書かれていない。そのため、この作品は、史実と『篁物語』というフィクションを織り交ぜてつくられているということが分かる。

今回挙げた二作品以外でも、篁は冥府と関わりを持つ人物として描かれている作品が圧倒的に多かった。その非現実的な設定がされているのは漫画や「ライトノベル」と呼ばれる若年層を対象とした小説や、児童文学などだけではなく、(一)に挙げたような、史実をもとに書かれた、若年層が対象の中心ではない作品にもされている。つまり、「小野篁」という人物を現代の人々が考えた時

に、「冥府との関わり」というものは切り離せないものであると考えられる。実際に篁が経験したのは、遣唐使船乗船拒否や、隠岐への流罪などが挙げられるが、現代作品には「地獄」や「閻魔王」などに関する伝説ばかりが取り上げられている。篁が経験したことも非常に大きな事件で、作品の題材になりうることであるが、それらがほぼ取り上げられず、篁の伝説のことばかりが扱われるのは、現代において篁の伝説は、非常に多くの人々に知られ、「篁」像そのものになっていることを意味しているのである。

#### おわりに

今回の論文では、篁の生涯や作品、伝説を中心に、さまざまな観点から小野篁という人物について触れ、なぜここまで多くの伝説が生み出されるようになったのかを考察することを目標にした。

篁は、自分を強く持っている人物である。誠実で、自分の意思を強く持ち、天命に逆らい流罪にされながらも実力をもって都に戻り、参議の位にまで登りつめるその姿は、現代の小野篁像に大きな影響を及ぼし、伝説もあいまって、ここまでの人気になったのだと考える。

また、前述のように、篁は閻魔王の補佐を務めたり難しい言葉の問題を解説したりと、史実とは関係なく超人のような扱われ

方をされていることが分かった。これらの要因は、篁が多才であり、容姿端麗で家柄も良く優秀であるのにも関わらず遣唐批判をして隠岐に流罪になるような、自身の地位を優先するよりも考えを曲げずに行動する点にあり、そのような姿が保身ばかりを考える人々の目には異端と映り、こうした伝説が残されることになったのではないか。また、現代の作品に描かれる篁は、どれも悪役になることはない。遣唐使批判をしたことで、隠岐に流されるという史実は、見方によつては天命に背いているため、悪役ととられても問題ない行動のようにも思える。しかし、現代作品の、人を助けたり、謎を解き明かすその姿は、三でも述べたように、ヒーローそのものなのである。ここにも人々の篁への憧れや、正しい行いをした人物であった、というような思いを読み取ることができる。正義を信じて行動する篁の姿に人々は憧れ、ここまで多くの伝説を生み出すこととなり、現代でも愛される人物になったのではないか。だからこそ、現代の多くの作品に篁は登場しているであろう。

注 (1) 日外アンシエーツ『和歌・俳諧史人名事典』(二〇〇三年 日外アンシエーツ p96)。

(2) 山本信吉『人物叢書 小野道風』(二〇一三年 吉川弘文館 p12)。

- (3) 黒板勝美 国史大系編集会「日本文徳天皇実録」(『日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録』一九六六年 吉川弘文館 p13)。
- (4) 平野由紀子『私家集全釈叢書三 小野篁集全釈』(一九八八年 風間書房 p28)。
- (5) 注3。
- (6) 注3。
- (7) 黒板勝美 国史大系編集会「続日本後紀」(『日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録』一九六六年 吉川弘文館 p81)。
- (8) 注7。「文徳天皇実録」の篁の薨伝には「六年春正月遂以押詔」の記述があることから、流罪の命が出されたのが承和五年の十二月十五日で、実際に流されたのが承和六年の春であると考えられる。
- (9) 川口久雄奈良正一『江談抄注』(一九八四年 勉誠社 p668-669)。
- (10) 注3 (p44)。
- (11) 注10。
- (12) 注1 (p97)。
- (13) 注12。
- (14) 注12。
- (15) 森克己『遣唐使』(一九六六年 至文堂 p15)。
- (16) 小名木善行『ねずさんの日本心で読み説く「百人一首」一千年の時を超えて明かされる真実』(二〇一五年 彩雲出版 p83)。
- (17) 王勇「遣唐使人の容姿」(『アジア遊学』164 一九九九年 五月 勉強出版 p183-184)。
- (18) 注17 (p184)。
- (19) 小島憲之 直木孝次郎 二宮一民 蔵中進 毛利正守『新編日

- 本古典文学全集四 日本書紀③(一九九八年 小学館 p226)。  
 (20) 中華書局『全唐詩 第四冊』(一九六〇年 中華書局 p1405)。  
 (21) 注10。  
 (22) 注7。  
 (23) 注6。  
 (24) 注7。  
 (25) 注7。  
 (26) 川口久雄 志田延義『日本古典文学大系七十三 和漢朗詠集  
 梁塵秘抄』(一九八七年岩波書店 p336-337)。  
 (27) 注16 (p90)。  
 (28) 佐伯有清『最後の遣唐使』(一九七八年 講談社 p26)。  
 (29) 注28 (p26-33)。  
 (30) 注28 (p33)。  
 (31) 注16 (p91)。  
 (32) 注7。  
 (33) 小沢正夫松田成穂『新編日本古典文学全集十一 古今和歌集』  
 (一九九四年 小学館 p191)。  
 (34) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(下)』(一九九八年 講談社  
 p323)。  
 (35) 田中嗣人『小野篁伝説考』(『華頂博物館学研究所』十号 二〇〇  
 三年 十一月 p22-25)。  
 (36) 注35 (p26-28)。  
 (37) 注35 (p29)。  
 (38) 注37。  
 (39) 呉羽長『小野篁一都から隠岐へ』(『国文学 解釈と鑑賞』第六  
 十九卷十一号 二〇〇四年 十一月 至文堂 p146)。  
 (40) 注3。  
 (41) 平林文雄 水府明德会『小野篁集・篁物語の研究 影印・資料・  
 翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』(二〇〇一年  
 大和出版 p228)。  
 (42) 注3。  
 (43) 注10。  
 (44) 注41。  
 (45) 注41。  
 (46) 小沢正夫『日本古典文学全集七 古今和歌集』(一九七一年 小  
 学館 p191)。  
 (47) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(中)』(一九九八年 講談社  
 p142)。  
 (48) 橋本不美男 有吉保 藤平春男『新編日本古典文学全集八十七  
 歌論集』(二〇〇一年 小学館 p366)。  
 (49) 尾崎暢殃 大坂泰『百人一首全釈』・窪田空穂『古今和歌集評釈  
 (中巻)』・嶋岡晨『百人一首を歩く』・竹岡正夫『古今和歌集全  
 評釈(下)』・松田武夫『新釈古今和歌集 上巻』。  
 (50) 川村晃生『八十島かけこ』考』(『三田國文』No.8 一九八七年  
 十一月 慶應義塾大学国文学研究室 p20)。  
 (51) 注50。  
 (52) 注50 (p21)。  
 (53) 馬淵和夫 国東文麿 今野達『日本古典文学全集十三 今昔  
 物語集III』(一九七四年小学館 p358-359)。  
 (54) 注47 (p142,147)。  
 (55) 注47 (p145)。  
 (56) 片桐洋一『古今和歌集全評釈(上)』(一九九八年 講談社



- (57) 注59 (p217)°  
 (58) 注46 (p190)°  
 (59) 注34 (p51)°  
 (60) 松村明『大辞林』(一九九五年 三省堂 p2677)°  
 (61) 注56°  
 (62) 松田武夫『新釈古今和歌集 下巻』(一九七五年 風間書房 p530)°  
 (63) 窪田空穂『古今和歌集評釈 (下巻)』(一九六〇年 東京堂出版 p21)°  
 (64) 注7 (p123)°  
 (65) 中田祝夫 和田利政 北原保雄『古語大辞典』(一九八三年 小学館 p1339)°  
 (66) 注94 (p321)°  
 (67) 注22 (p528)°  
 (68) 注39°  
 (69) 佐伯梅友『日本古典文学大系八 古今和歌集』(一九五八年 岩波書店 p269)°  
 (70) 松村明 山口明穂 和田利政『古語辞典』(二〇一五年 旺文社 p1059)°  
 (71) 川端善明 荒木浩『新日本古典文学大系四十一 古事談 続古事談1』(二〇〇五年 岩波書店 p511)°  
 (72) 佐田公子『古今集の桜と紅葉』(二〇〇八年 笠間書院 p27-28)°  
 (73) 注46 (p358)°  
 (74) 注39 (p132)°
- (75) 注46 (p359)°  
 (76) 浅見和彦『新編日本古典文学全集五十一 十訓抄』(一九九七年 小学館 p293-294)°  
 (77) 小島憲之 木下正俊 東野治之『新編日本古典文学全集八 萬葉集③』(一九九五年 小学館 p41)°  
 (78) 注77°  
 (79) 『古今和歌集』巻第十五 恋歌五 七七五°  
 (80) 注6 (p488-489)°  
 (81) 注6 (p489-490)°  
 (82) 注8°  
 (83) 注6° (p491)  
 (84) 与毛星和『冥官小野篁』(二〇一六年 文芸社)°  
 (85) 注6 (p82-85)°  
 (86) 馬淵和夫 国東文麿 稲垣泰一『新編日本古典文学全集三十七 今昔物語集③』(二〇〇一年 小学館 p148-150)°  
 (87) 杉田圭『超訳百人一首うた恋ひ。4』(二〇一三年 メディアアファクトリー)°  
 (88) 注4 (p39-41)° (二〇一六年度卒業)